

## N-8 石巻市牡鹿地区小淵浜・鮎川浜・新山浜 2012年8月3日(金)

---

報告者名	山口未花子	被調査者生年	①未確認(男)
調査者名	山口未花子	被調査者属性	①小淵浜実業団員
補助調査者	兼城 糸絵		

---

### 被調査者(主な聞き書きは話者①から)

- \*話者② 1948年(男)、牡鹿地区宮司(N-2・N-6話者、N-9・N-10話者②)
- \*話者③ 生年未確認(男)、鯨歯工芸品職人
- \*話者④ 1950年(男)、新山地区行政区長(N-7・N-9・N-10話者)

### 石巻市牡鹿地区小淵浜：五十鈴神社例祭(現地調査は8月3日のみ)

2012年8月2～3日にかけて小淵浜の五十鈴神社にて例祭が執り行われた。2日は宵祭といって、震災以前は午後8時や9時等遅くから行われたが、今年は5時頃から始められた。小淵の例祭の特徴として、この宵祭のほが本祭であり、翌日は神輿を担ぐだけということがある。宵祭では、神社にて神事が執り行われ、その後集落の集会所にて直会が行われる。このとき出店等も出す。これは浜の子どもたちがとても楽しみにしている催しである。出店では菓子類のほか、輪投げなども用意する。商品の購入に数万円かけて、いい景品を用意する。子どもたちからは100円くらいのお金をとるが、おまけを沢山するのでみんないい景品をもらうことが出来る。去年はボランティアによる演芸会も行われた。また、神輿は実業団だけが執り行うのに対し、宵祭りには氏子や行政区長なども参加する。また直会には子どもも含めた集落の成員の多くが参加する。また、神社では実業団のメンバーが残って夜籠りをする。

3日目の午前11時頃から五十鈴神社境内にて宮司の祈祷が行われる。参加者は小淵浜と書かれたハッピを着た実業団のメンバーと宮司、取材にきた新聞記者などである。ハッピはボランティアの人たちの助けによって新調したものであるという。社の前には神輿とこども神輿が置かれており、その手前にテーブルが設置されていた。テーブルには盛り塩の上に魚が2尾置かれたもの、果物と野菜が盛られたもの、のし袋などがおかれたものの3つの三方と、神酒、水の入ったコップが置かれていた。神事では宮司が祝詞を唱えた後、実業団の団長、副団長、その他のメンバー代表が順番に榊を修め拝礼した。

その後、太鼓と笛、こども神輿、神輿は神社から下ろされ、それぞれ軽トラックに乗せられた。その後、塩を撒く者が先頭になり、太鼓と笛のトラック、子ども神輿のトラック、神輿と賽銭箱のトラックの順で3台の軽トラックが続き、そのあとを宮司が徒歩で歩きながらゆっくり集落を巡回する。神輿は、震災前は担いでいたのだが、今は人がいなくなったので軽トラックに乗せて移動しているという。去年は震災後であったため、これまでとは異なるルートで神輿が集落を回った。今年も、浜のなかに3か所ある仮設住宅まで行くために、震災前と比較して長い道のりを歩くこととなった。

神輿の行く先々で住民たちが賽銭を入れ、神輿に向かって手をあわせていた。また、人によってはのし袋に入れた札を渡す場合もあった。賽銭は用意していた賽銭箱へ入れられた。宮司さんや他の参加者によると、以前は子どもたちが100人近く参加して子ども神輿を担ぎ、担げなかった子どもは、大人の神輿につないだ縄を握ってついて回った。去年も震災があり人数は減ったが、今年の例祭はさらに人が少なかったようである。

その後、神輿の一行は神社近くにある集落を抜けたあと、表浜漁協の方に向かった。それからガレキ集積所を横目にして移動し、そこから仮設住宅を目指した。仮設住宅では群馬県からやってきたボランティアによる焼きそば

などの炊き出しが行われていた。神輿が到着すると、人びとが軽トラックに乗せられた賽銭箱に次々と賽銭を入れ、手を合わせていた。その仮設の斜め向かいに位置する給分浜の人びとが多く住む仮設にも神輿は立ち寄り、その後神社の方向に改めて向かった。その途中にある旅館の前で用意された菓子などを受け取っていた。菓子を用意していた人が「いつもなら子どもたちがついてきているのに」などと残念そうに話していた。

それから神輿の一行は小湊浜の漁港の方に向かった。漁港にはのり加工場などが建設中であった。神輿は工場の横を抜けて一旦県道に出た後、コンビニ近くにある仮設住宅へと向かった。そのまま仮設住宅にて休憩をする。その後、チャヤコと呼ばれる「勤め人」が住む地域をまわる。本来ならばそこで終了であるが、仮設住宅にて行われている炊き出し会場に行き、昼食をとった。例年神輿は13時頃には終わっていたので、途中で昼食をとることはなかったが、今年は仮設まで神輿が巡回したために時間がかかったため、急きょ昼食と休憩をとることとなった。炊き出しをしていたのは群馬からきた「上州八木節 赤堀郷友会」の人びとである。彼らは八木節の披露と、出店の運営をボランティアでおこない、やしそばやかき氷、生ビール、日本酒などを準備していた。そこで昼食をとった後、14時すぎに神社へと戻った。神社の左側に神輿を収納する小屋があり、そこに子ども神輿と神輿を納めた。扉を閉める前に、宮司によって祝詞が唱えられた。全ての行程が終了したのは15時頃であった。

### 小湊浜のまつりについて

1月3日に「ご親睦会」と呼ばれる会を開き、3日と4日には獅子舞を行う。その際には区長の家を起点に時計回りに家々を回っていく。獅子頭は津波によって流失したが、今年の7月に新しい獅子頭が出来上がったのでその報告会をした。そして、旧暦6月15日には五十鈴神社の例祭が行われる。宮司さんによると、牡鹿半島の中でも旧暦で行事を行うのは小湊浜と小網倉浜だけだという。他の浜は新暦でも土日に行うことが多いのだが、小湊浜は旧暦のとおりに行うのだという。また、9月初めの初巳の日に金華山でとり行われる例祭に獅子を奉納する。

これら小湊浜の祭りはすべて実業団によって行われている。実業団のメンバーは小湊浜に居住する各世帯から成人男性1人に加入権が与えられており、基本的には長男になるが、その世帯を継ぐのが次男である場合などは次男がメンバーになることもある。ただし、チャヤゴなど、漁業に従事しない地区ではほとんどメンバーを出さない。実業団のメンバーは震災前には50人前後いたようである。しかし、住民票などを移した場合はその資格を失うこともあり、現在は数が減ってしまった。

実業団に加入する年齢は決まっているわけではないが、大体高校を卒業し、仕事についたら加入するというようになっている。20歳くらいまでには大体加入する。年齢制限は47歳だが、20歳から38歳までが役員で、それ以外は役員にはなれない。ただし38歳から47歳の間のメンバーから団長と副団長が選ばれる。団長は2年務め、その後は年齢に関係なく実業団を退く習わしである。

祭りは実業団が中心になって執り行われるが、実業団でも身内に亡くなった人がいた年は、祭への参加を差し控える。

### 生業について

小湊浜の主な生業は漁業で、なかでもかき、のり、わかめの養殖が主要な産業として挙げられた。この他、漁船などもあり、今の時期はアナゴ漁の漁期にあたる。小湊浜の港に停泊しているほとんどの船がアナゴ漁をおこなっているという。従って例祭では大漁祈願がなされるという。

ただし港や養殖、加工業の中心であった地域は低地であったために津波の被害が大きかった。しかし現在その場所に工場や倉庫が建設されており、神輿のルート上でも2つの倉庫と1つの加工場がほぼ完成した状態で操業に入るのを待っていた。

養殖業の中でも、のりの養殖は加工までを浜で行うため地域における大きな産業となっている。今回、見学させてもらったのり加工工場は全自動式の大型機械が導入されており、一日7,000枚もののりを作ることが可能だという。機械を導入するまではすべて手仕事で行っており、天日干しなどの作業も含めるとのり作りは時間のかかる仕事だったようである。工場は24時間稼働するとのことで、休憩室なども用意されていた。今は有明海ののりがブランド化しており有名なのだが、コンビニなどで流通しているのりは宮城県産が中心なのだという。現在はのり

の種をつけるための網を作っている最中であつた。たねは松島でつけるのだという。

また、漁港や集落のあちらこちらに大量のホタテの貝が置かれていたが、それはカキの養殖で使うとのことである。ホタテの殻は主に北海道から購入している。また、わかめは巨大な縄にわかめの芽を挟み込み、その縄に巨大なイカリをつけて海に沈めて養殖する。それらの道具が現在用意され、これから養殖の再開に向けて準備が進んでいることがうかがえた。

ただし最近では町へ働きに行ったり、出稼ぎをしている人も多い。

#### 被災状況について

小淵浜は2つの方向から津波が押し寄せてきたといい、多くの住宅や漁具が流されたという。神社は高い所にあつたので神輿は無事であつたようだが、獅子頭が流失するなどの被害もあつた。太鼓も皮を張り直したという。今は家を立て直して暮らしている人もいるが、仮設住宅にて生活している人も多い。

高台移転の話が進められているが、候補地が高台で、かつ港から遠いため、例えば今漁を行っているアナゴ漁の加工に従事している年配の女性たちから、「通うのが大変になる」という意見が出されるなどスムーズに進んでいくわけではない。

祭りについて、去年はやるかどうか迷った。しかしやらなければ、祭りが途絶えてしまうかもしれないし、そうなったときに浜の人から「あの団長のときで祭りが終わってしまった」と言われたら辛い。しかし、一存で決めることもできなかったで、アンケートをとって決めた。家族を失って祭りに参加できない人も多かったが、祭りを楽しみにしているお年寄りなどのためにもやることが出来てよかった。

#### 鮎川浜 鯨歯工芸品店

鮎川浜の仮設商店街にはいつている鯨歯工芸品の職人さんに話を伺った。話者は鯨の歯を用いた工芸品を作ることを生業としている。祖父の代から鮎川にて鯨の工芸品を作る店を営んできた。祖父はもともと佐賀県の唐津出身であるという。鮎川はもともと九州など伝統的な捕鯨地域から捕鯨者が流入して拡大した集落であるが、捕鯨を生業にする人々とともに、捕鯨の周辺産業に従事する人々も入ってきたことを裏づける話である。話者は若い頃に印章を作る免許を取得し、店を継いだ。鮎川には震災前4軒の鯨歯工芸品店があつた。家が最も古い本家で、もう1軒はいとこの経営。どちらも師匠は祖父である。その他の2軒はプロではなく、退職した捕鯨者等が始めた店である。捕鯨関係者は結構鯨歯が手に入るのて上手い人は器用に工芸品を作り、中には店を始める人もいる。用いるのはマッコウクジラの歯である。マッコウクジラの歯は、象牙に似ているが、水分を吸うなどの違いがあり、また古くなるほど表面の色が濃くなり、それと同時に文様が浮かび上がる、これが貴重とされて、愛好家がいる。しかしマッコウクジラ漁はモラトリアムの発行によって商業的には禁止されたため、新しく手に入れるには調査捕鯨で捕獲されたものしかない。しかし南氷洋の調査にはシーシェパードなどの妨害が多く、捕獲量が少ないこと、またサイズにこだわらないため、工芸品、特に印鑑を作るのに適した大きなサイズの鯨歯を手に入れるのは困難である。

#### 鮎川浜での被災について

店も自宅も津波によって流されたので、昨年11月頃に開設した仮設商店街「おしかのれん街」に店を構え営業を再開している。話者は被災後、総合支社の2階にて避難していたが、結局仮設住宅へ移れたのは7月(?)頃だった。仮設住宅への入居はくじ引き制であつた。それについて話者は老人や小学生を抱える世帯などが優先されるべきであつたと強い口調で語っていた。

鯨の歯などを加工するには様々な道具が必要であるが、それも津波ですべて流失してしまった。そのため、関東にいる兄弟子供が必要な道具をそろえてくれた。ただ、大きな万力や旋盤は作業所の後ろにコンクリートで打ち付けられていたので、津波に流されなかった。まだ使えるだろうと思いついてみると、それらも誰かに盗られてしまっていた。鯨歯はモラトリアム前に購入してあつたストックがあつたのだが、店のほうにおいてあつたものは多くが流された。しかし鯨の歯は象牙と違って水を吸い重くなる。そのために他のものより流されにくく、被災後に店の周りを探したら結構がれきの中から発掘することが出来た。しかしそれをよけて店の敷地内に集めておいたら、



写真1 五十鈴神社神事



写真2 拝礼



写真3 神輿巡回



写真4 仮設での休憩と群馬からのボランティア演奏

誰かが持って行ってしまった。ただし、そことは別の場所に所有していた倉庫があり、そこに分散して鯨歯ストックを保管していた分が残ったので、今も仕事をつづけられている。

#### お客さんからの支援

店もすべて流されてしまったのだが、以前鮎川に旅行にきていた夫婦が写真を贈ってくれた。彼らは震災後車に物資を詰めて鮎川までやってきた。本当にありがたかった。また、震災後雑誌やTVなどで取り上げられたため、遠方からも応援の意味での注文が殺到している。そうした気持ちに答えて、以前より安い値段で売っている。それが自分に出来る精いっぱいのお礼である。ただし、本来印鑑の場合だと3~4時間で出来上がるのだが、道具の不足や集中して作りたいということもあり、数日かけている。値段も通常より少し安めに、皆に買ってもらえるようにしている。

#### 新山浜

区長である話者は津波で船を失ったが、新しく注文した船はすでに石巻まできている。また漁を始めようと思うが、護岸の整備がまだ十分ではないので、船は別の場所につけるかもしれない。漁に出ようにも、放射能やら地盤沈下やらで非常に不便している。これは皆が抱える問題でもある。特に自分の専門であるヒラメは放射能の影響が大きく出る。なぜなら小女子を食べるから。小女子からは放射性物質が検出されており、売っても売れない。同じくよく獲れる獲物であるタコは、エビやカニなどを食べるのでそこまで心配はない。ただし、捕獲があった場合はその分のお金を支払われるので、一応漁には出ると思う。しかし、獲って捨てるだけというのはどうも好きではない。だから船が来ても漁に出るかわからない。タコをとってもいいのだが、タコは獲れるときととれないときがあ

る。人によってはカニがとれるときはタコがとれず、カニがとれないときはタコがとれるという。タコはカニを食べるので、カニがいるということはその場所にまだタコが来ていないということなのだろう。それでいえば最近カニがとれるので、タコはあまりとれないのではないかという気がしている。

話者は震災以前、魚を鮎川に卸していた。他の人は儲かるように高く売れる場合は石巻など別の場所に卸す人が多い。

話者の家では、Hガニ（地域名と考えられる）、ツブガイ、アワビ、ウニ、カツオとアジの刺身、鯨の内臓がふるまわれた。これらのほとんどは同じ浜の人や、牡鹿の別の浜の親戚からもらったもので、しかも今日とれたものが多いという。ただし、アワビなどはたまたま隣の浜で捕獲日だったためにおすそわけされたので、今の時期毎日これらの魚種がとれるということではない。このなかで、ツブガイの中に入っている黄色い部位は「ヨード」なので食べ過ぎると酔う、と言われているという。なので、この部位はなるべく食べる前に取り去るべきだという。1度孫がこれをとらずにツブガイを10個ほど食べた後で、酔っぱらってどこを見てかわからないようになった。後遺症などが残るわけではないが、食べた直後に車の運転などはしないほうがいだろうという。